

神田信夫先生を偲んで

松村 潤

内藤湖南先生が盛京崇謨閣で『満文老檔』を発見されたのは1905年のことである。そしてその史料価値を調査され、1912年に羽田亨先生と共に、これを写真に撮られて我が国に将来された。内藤先生の門下の京都大学関係者の方々に1930年ごろから『満文老檔』が利用され、多くの研究が発表された。

一方、東京大学の東洋史研究室では、戦後間もなく、神田信夫先生を中心として満文老檔研究会を組織して、『満文老檔』の訳註作成にあたった。私が神田信夫先生に親しく接するようになったのは、この訳註に携わってからである。1953年、私が東洋文庫研究員となつてからは、研究会も東大の研究室から東洋文庫へと遷った。1955年には東洋文庫叢刊十二として、譯註の第一冊を刊行し、毎年ほぼ一冊のペースで刊行をつづけ、1963年の第七冊をもって完了した。この間の神田先生の御努力は大いに称えられてよい。

ところで、『満文老檔』は乾隆朝の編纂に拘わり、先生はその原資料である檔案に多大の関心を持っておられた。北京の故宮博物院の文献館による内閣大庫の檔案整理によって、原檔は1936年に発見されており、同年の満洲事変の勃発により、日中関係が悪化し、故宮の文物は、いわゆる南遷によって上海に運ばれ、やがて南京の收藏庫に収められたが、1936年、日中戦争が始まると、南京からさらに奥地へと疎開した。そして日本の敗戦によって1947年末には南京へ戻った。しかし国共内戦の結果、国民政府は台湾へ逃れ、南京にあった故宮の文物も台湾へと運ばれた。神田先生は原檔も他の文物と一緒に台湾へ運ばれたのではないかと推測された。

1962年に台湾を訪れる機会を得たが、当時故宮の文物は台中郊外の霧峯北溝に保管されており、原檔の所在を確かめる状況にはなかった。翌1963年末に再び神田先生と共に台湾を訪れたが、その際に李学智氏により、原檔の写真を見せられ、これによって原檔が故宮博物院に現存することが判明した。さらに1965年には、台湾大学教授で満洲人の広禄氏と李学智氏の共著による「清太祖老満文原檔与満文老檔之比較」と題する研究が発表された。1965年11月に台中霧峯の故宮博物院は台北士林の現在地に移転した。そこで1966年夏、神田先生、岡田英弘氏と共に三度、台北を訪れ、新院長に就任された蔣復璁氏に原檔の閲覧を申し入れた。蔣院長の特別のほからいによって、まだ木箱に納められていた原檔を見た時の感動は今も忘れられない。

神田先生にとって、台湾は御尊父神田喜一郎先生が台北帝国大学へ赴任されたことにより、1929年から台北高校を卒業された1941年までを過ごされた処である上に、1960年代には戦前の建物も多く残り、懐旧の念に堪えがたかった様であった。

満族史研究会が設立されたのは、1986年11月のことで、会長には三上次男先生が推挙された。しかし翌年3月三上先生は逝去され、神田先生が後任の会長に就かれた。恰度この頃、中国大陸では文化大革命が終息し、開放政策がとられる様になり、日中の学術交流も活発となり、国際学会への参加、文献調査、史跡調査へと、神田先生を中心として満族史研究会のメンバーが次々と中国を訪れたのである。

こうした活動の成果は『満族史研究通信』によって紹介され、多くのことは若い研究者に多大の便宜を与えたのである。東洋文庫の清代史研究室では、中国第一歴史檔案館所蔵の満文内国史院檔天聰七年檔の講読会を神田先生を中心に開催し、先生は熱心にその指導にあたられた。この檔案の成立過程には解明されていない点が多いが、『満文老檔』に欠けている太宗朝の研究には極めて重要なものである。1980年に第一歴史檔案館を訪れた時には、補修せねばならぬものもあり、その全貌をうかがうことができなかったが、1986年には同館より、その漢訳が刊行されている。しかし漢訳を史料として使うには、多くの問題点があり、1975年に神田先生によって作成された『旧満洲檔——天聰九年』にならって訳註を刊行する必要があるだろう。先生の御生前には間に合わなかったが、新たに刊行された『内国史院檔——天聰七年』は、そのモデルケースである。謹んで先生の御霊前に捧げる次第である。

我が国のみならず世界の満洲学に輝かしい足跡を遺された先生の御冥福を心から祈ってやまない。

(MATSUMURA Jun 東洋文庫・日本大学名誉教授)